

初夏の芸術論

雨音多一

高校二年生の江戸川ひさきは、好きな絵にまつわる仕事を得た。

——ギャラリーの店番。

それがひさきのアルバイトだった。夏休みまであと一か月余り。「学生は遊ぶのが仕事だ」と言う人もいる。良く学び、良く遊べ。しかしながら「夏を謳歌せよ」と言うのは、高校二年生には酷かもしれない。学業をおろそかにしては、「サクラ咲く」日を迎えられないからだ。

ひさきは美術と音楽が好きで、文学も好んで読んだ。とりわけ美術は、将来美大に進みたいと考える程であった。だから、このアルバイトは何より楽しく時間を過ごせるひと時なのだ。好きな絵に囲まれて、柔らかな音楽を流し、文庫本を眺める。それは至福の時だと言えた。ひさきは背が割に高い方で、目立つ容姿をしていた。端正な顔立ちには気品があり、クラスの男子学生からも人気があった。高校二年生のひさきは、彼氏という存在をあまり求めないタイプだった。同級生との話題の一つには恋愛話があったが、奥手なひさきはいまひとつ、そういう話には乗ることが出来なかった。

「お爺さま、今日ギャラリーに行っても良いかしら」

ひさきは朝食の席で、そう祖父の江戸川明に尋ねた。

「勿論良いよ。学校が終わって、直ぐかい？」

「はい」

ひさきの祖父は七十才をすこし越えたところであった。ひさきとは五十五才違い。血圧が少し高めな位で、後は健康体であるといえた。相方の妻を亡くしておよそ二年が経とうとしていた。当初は気落ちしていた明だったが、ギャラリーを建て、そこに妻のキルト作品を展示することで、その想いを和らげていたのだった。街はずれにある自宅の隣の蔵をギャラリーに改装したのは去年のこと。何回か企画展を重ねて、着実に実績を築いていた。

「今日は五時位になると思います」

「そうか。分かった」

「それでは行って参ります」

「気を付けてな」祖父の明が声を掛けた。

「ひさき、行ってらっしゃい」母の国子もキッチンから声を重ねた。

「はい」

ひさきは爽やかな六月の風の中へと歩み出た。太陽が雲間から顔を出し、朝の雨の跡に降り注いだ。道路の水たまりが、太陽光を受けて煌めく。ひさきの学生鞆が優しく光を反射した。西の空に、大きな虹が円弧を描いた。美しい風景はまるで絵画の如く。それはひさきを祝福しているかのようだった。

「ねえ、ひさき。今度写真部にギャラリーを貸してもらえないかなあ」

二時間目の休み時間に、ルリが話しかけてきた。ルリは写真同好会の副会長をしている。写真同好会は、四人程の小さなサークルである。学校の部にはまだ昇格していない、同好会なのであった。

「いいけど、いつ頃の事？」

「文化祭のときよ。十一月ね」

「帰って、お爺さまに聞いてみるわ」とひさきは応じた。

ルリはショートカットが良く似合う少女で、愛らしさと美しさを兼ね備えていた。異性からだけではなく、同性からも好かれる人間味があった。ルリは背が低く、いつも動いていないと気が済まないタイプだった。良く動く瞳は、小動物の姿を思い起させた。鞆に小型のカメラを忍ばせて持ち歩き、シャッターチャンスを逃さないように気を配っていた。

「ところでルリ、数学の宿題終わった？」

「一応終わったケド。ノート見たい？」

「お願いできるかしら」

「交換条件として……」

「何？」

「面白い話をなにか一つ聞かせて」ルリが悪戯っぽく微笑んだ。

「……面白い話ねえ」

「何かある？」

「そうだ。ギャラリーにくるお客様に、ポエムの朗読をする方がいらっしゃるの」

「ふむふむ」

「その方と、写真の個展のコラボはどうかしら」

「写真に囲まれて、ポエムの朗読を聞くのね」

「うん」

「素敵じゃなあい」

ルリは頷いて瞳を閉じた。

「ポエムの朗読かあ」

「陽向さんって、社会人の女性なの。その人って」

ひさきはそう言うと、ノートを取り出した。

「さ、宿題宿題」

雨は昼休みにも降った。帰りしな、雨に当てられないかと不安を抱いたひさきだったが、雨が完全に乾いた道を心穏やかに歩いて行った。学校を出たのは四時過ぎで、家に帰りつくころには、四時半をまわっていた。部活は特にしていなかったが、美術部に出入りして、授業外にデッサンを学んでいた。

「ひさき、お帰り」

キッチンから国子が声を掛けた。国子は今年五十才になる。専業主婦として家を守り、家事と育児をこなしてきた。ひさきには兄弟姉妹が無く、ただ一人の娘を随分と可愛がっていた。髪はロングで、後ろに流していた。その表情は常に明るかった。夜明けから日が暮れるまで、いつも家族の事を案じていた。

「お母さま、只今戻りました」

ひさきはそう言いながら、鞆を置いた。

「お爺さまは、ギャラリーかしら」

「多分そうね」

「お母様、進学のことですが……」

「やっぱり、美大？」

「はい」

ひさきは小さく頷いた。

「銅版画をしてみたいんです」

「版画ねえ」

「銅版画をどうしても学びたくて」

「それで、ひさきが幸せになるなら、お母さんは良いわ」

「有難う」

「お父さんには、何て言おうかしら」

母の国子が首を傾げた。

「私から話します。折りを見て」

「明後日の日曜日には居ると思う。頑張ってね」

「はい」

「そうそう、おじいちゃんの所へ行くなら、これを届けて貰えるかしら」

国子はそう言って、冷蔵庫からバケツに入ったゼリーの器を取り出した。

ひさきは母屋を出ると、庭を歩いて隣のギャラリーへと足を運んだ。庭には生垣があり、バラの花でアーチを造ったゲートもあった。

「ひさきです。只今戻りました」

「お帰り」

ギャラリーで新聞を広げていた祖父の明は、顔を上げてひさきを見た。

「お爺さま、学校の文化祭に合わせて、ギャラリーを貸して欲しいと、友達に頼まれたの」

「美術部かい？」

「いいえ、写真の同好会よ」

「そうか」

「ええ。できれば無料をお願いします。店番は、私がしますから」

「……それなら良いが」

「あと、陽向さんとおっしやる女性の方……」

「ああ、詩人のね」明が頷いた。

「その方に、ポエムの朗読をしていただいたらどうかしら」

「面白いね。なかなか良いアイデアだね」

ひさきは嬉しくなって、声を弾ませた。

「有難う」

「ひさき、すまないがコーヒーを淹れてくれないか」

「はい、只今」

ひさきはそう言うと、ケトルをガスコンロにかけた。ペーパードリップの紙フィルターをセットし、挽いたコーヒー豆を取り分ける。

お湯が沸いた。細長いケトルの先から、円を描くようにお湯を注ぎ込む。コツを掴むまでは難しいが、慣れてしまえば話ながらでも出来る作業だ。

「はい、コーヒーです」

「ああ、有難う」

「お爺さま、あの……」

「どうした？」

「誰か、デッサンを教えてくれる方をご存知ありませんか？」

「デッサン？」

「はい。美術大学の試験科目にデッサンが有るんです」

「受験対策か」

「学校で美術の先生に頼んでもいるのですが……」

「頼んだらお金はどうするんだい？」

「このアルバイトのお金を使います」

「そうか。なら、良い人が居る」

祖父の明は携帯電話を取り出した。

「時間は夜かい？」

「はい。火曜日か木曜日なら大丈夫です」

「そうか」

「お願い致します」

「今、一寸電話してみるよ」

江戸川明は携帯を操作した。

「……もしもし、久しぶり。ああ、元気だよ。そちらは？ 何よりだね。今、絵画教室はやっているかい？ ああ、良かった。うん、生徒。私の孫娘なんだが……」

しばらく話をして、江戸川明は電話を切った。隣でひさきが、緊張した面持ちで江戸川明の言葉を待っていた。

「生徒を募集しているそうだ。後でこの番号へかけてみてくれないか」

江戸川明はそう言うと、メモに番号を書いてひさきに渡した。

「ありがとう、お爺さま」

「ひさき、おはよう」
ルリがニコニコしながら挨拶する。
「おはよう、ルリ。あの話だけど……」
「ギャラリーの件ね」
「お爺さまに聞いたら、貸してくださるって」
「良かったー。レンタルの料金はお幾らかしら」
「無料よ」
「でも、お金かかるよね？」
「私が店番するから大丈夫」
ひさきが頷いた。「かかるのは人件費くらいよ。いまもアルバイトしてるしね」
「ギャラリストって奴？」
「まあ、格好良く言えばそうだけど、私たちは、店番って呼んでいるの」
ルリは天井を見上げた。
「いいなー、そういう職業に私も就いてみたいよ」
「ルリはどんな仕事をしたいの？」
「ブライダル・フォトグラファーになってみたいのよ」
「ブライダル系か。幸せそうね」
「シアワセ生命体ですから」
ルリはそう言うと微笑んだ。

朝礼のチャイムが鳴った。
「じゃ、また後でね、ひさき」
「ではまた」

放課後になった。ひさきは美術室へと向かっていた。美術室には、柔らかな日射しが入っていた。やさしく降る光の雨に、ひさきは夏の先兵を感じた。美術室には、美術を担当する女性教師がいて、数名の生徒と談笑していた。

女性教師の名は「村木沢」といい、最近赴任してきた先生だった。ひさきは、高校二年の春から、村木沢先生のもとで美術を学んでいた。

「先生、こんにちは」
「ひさきさん。今日もよろしくね」
「あの、先生、受験対策のことなのですが……」
「ああ、学外のデッサン教室の話ね」
「はい」
「学外で学ぶことも、良い経験になるだろうね。私に出来ることがあれば、もちろん協力するわよ」
「先生、ありがとうございます」
「それから今日の課題は、このトルソのデッサンよ」
「はい」

ひさきはそれから小一時間余り、鉛筆をはしらせた。初夏の陽ざしと心地良い風が、美術室に流れてきた。途中、美術部の顔見知りか、ひさきに近づいてきた。佐藤加世もその一人だった。

「ひさき、今日もデッサン？」
「うん」

加世はひさきと同じ高校二年生だが、クラスは別だった。美術好きの二人は、美術室で談笑することが多かった。

「ああ、今日のデッサン、光の加減が難しいね」
「そうなの。布の模様も繊細だし」とひさきが洩らした。
「私も描いていきますか」
加世はそう言うと、画板に向かった。
「今日は天気がいいなあ。こんな日は……」
「こんな日は？」
「涼しい河原へでも行って、外でデッサンしたいなあ」
「またか」

それから二人は、黙って絵に向かった。ひとりのような、ふたりのような優しい時間。時間とは味わうものである。こんな時間を過ごす時には、芳醇で味わい深い感覚が宿る。それを愉しむひと時が、ひさきにとっては何よりも嬉しかった。それは、カフェで過ごす時間に似ていた。

カフェで、カフェ・ラテを注文した後無為に流れる、そんな時間の感覚。何もしていないようで、多くの事がバックグラウンドで動いているような、そんな感覚。

「誰かが私のために何かをしてくれている」。そうひさきは思った。それが誰なのか、今のひさきは分からなかった。それは、もしかすると神さまや仏さまなのかも知れなかった。

ひさきは授業と放課後のデッサンを終え、家路についた。時計は午後六時をまわっていた。

「ひさき、お帰り」

「只今、戻りました」

キッチンへ向かい、母の国子と言葉を交わす。国子は専業主婦で、家事や炊事をこなしていた。

「あの、お母さま……」

「何かしら」

「今度、学外でデッサンを学びたいのです。大学受験対策として」

「すぐにでも？」

「はい」

「構わないけど、お金はどうするの？」

「ギャラリーの店番で稼いだお金を使おうと思います」

「そう」

「お爺さまから、連絡先を聞きましたの。森山先生とおっしゃる方です」

「ああ、割と頑固な方ね」

「そうなのですか」

「ええ、画力には定評があるそうよ」

ひさきが頷いた。

「大丈夫よ、優しい先生だから」

「お母さまもご存知の方なのですね」

「ええ、少し」

「もう少し、お人柄を聞かせて頂けないでしょうか」

「ええ、洋画をしていて、今、五十才の方です」

「油絵ですね」ひさきが頷いた。

「髭をたくわえていたわねえ」

「随分とお詳しいですね」

「高校の同級生なの」国子が微笑んだ。

「そうなんですね」

「昔からカタブツでね、少し難しいところがあるの」

「はい」

「私からも、後で連絡を入れておくから大丈夫よ」

「有難う」

ひさきは涙目になってしまった。

こうやって人は成長してゆくのだろう。一步一步、少しずつ少しずつ。歩みは亀のようかもしれない。だがそれは岩を削る水滴のようである。一步一步、一滴一滴努力すること。それが、未来を切り拓く力となるのだ。

日曜の朝がやってきた。夜が明けるのが早いこの季節。夏至を過ぎ、これから日が短くなる時期である。初夏の朝の涼やかな風を窓から受けて、ひさきは目覚めた。

「素敵な日になりそうね」

寝巻を着替え、顔を洗ったひさきは、カメラを持って、散歩に出掛けた。

「おはようございます」

家を出てすぐのところで、近所に住む老婆が自分の家の草むしりをしていた。

「ああ、ひさきちゃん、おはよう」

「いい朝ですね」

「ええ」

軽い挨拶を交わして、ひさきは歩を進めた。ふと目に飛び込んできた風景に、カメラを構える。

パシャリ。

空を切り取ったカメラが、初夏の風を受けて煌めいた。

——純粋な想いがカメラに残るの。

写真同好会のルリの言葉を、ひさきは思い出した。

「美」とは、何だろうか。「美しさ」とは何だろうか。

それは美大に入れば分かるのだろうか。

それはデッサンが上手くなれば分かるのだろうか。

それは.....。

幾ら考えても、ひさきはその答えを出せなかった。それは遥か彼方、空の向こう、大地の果てを探すようなものだった。

ひさきは、その解に辿り着きたいと願った。

それは初夏の朝の事だった。

(結)

初夏の芸術論

<http://p.booklog.jp/book/129988>

初版発行 2020年 2月 6日

著者：雨音多一

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/taichi-amane/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/129988>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：デザインエッグ株式会社